

日本の学校における P4C——私の P4C 活動を振り返っての考察⑤

兵庫 公立小教諭 金澤 正治

第六章 P4C を生かした単元開発をしよう

2010 年は、本間先生と一緒に P4C を学校の研究として取り組んで 3 年目となった。総合的な学習の時間や教科等に対話を取り入れた単元開発を各学年で実践することにした。

1

5 月 25 日には、3 年目の取組みについて研究全体会で「伝え合う力 どうして、何を、どのように ―こどもの哲学を参考に―」という題で本間直樹先生と高橋綾先生の講演を実施した。²

まず、本間先生が、伝え合うとは何かについて話された。

伝え合う力を養うには、「言いたいことが言える場を、環境を作っていく」ことが必要であり、「何度でもやり直せるへたくそなコミュニケーションこそが、…伝え合うことにつながる」のであり、「口に出すことで、人に聞いてもらうことで、初めてそうだったのか、自分はそんなことを考えたかったのか、自分の悩みはここにあったのだ、ということは、実は他人に受け取ってもらって初めてわかることなのです。だから、口に出して、とにかく他人とつながるということがやっぱり伝え合うことに欠かせない。」

次に、対話を取り入れた実践として、オーストラリアのビューランダ小学校が週 2 回行っている哲学の授業について紹介された。哲学の授業でどんなテーマで対話し考えているのか、考えるためのツール、スキルの例を挙げられ、各学年で考えるスキルを繰り返し訓練していることを話された。

最後に、高橋先生が昨年度の相互問答法実践が道德教育や人権教育に有効であることと、教科において単元開発するにあたって、4 つのポイント、「問いかける（知的関心・批判的思考）」、「感じる（感性、共感）」、「コミュニケーション（聴く、話す）」、「協働する（ケア、共同性/地域への関わりの広がり）」で学習活動を計画することについて話された³。具体的に本年度は、3 年生は海浜の観察をする環境教育、5 年生が美術館での美術教育の授業に取り組んでいくと話された。

ここでは、まず、「環境教育 3 年生 「〇〇浜調査隊」⁴を紹介します。

兵庫県は、全県の 3 年生に環境体験授業を実施することになっている。

勤務校では、校区の海浜を守る活動をされている NPO「チーム里浜づくり」の方と共に体験学習を行ってきた。本年度は、対話を生かした学習活動ができるように本間先生と高橋先生、教職員、チーム里浜づくりの方と事前に話し合う機会を持った。

前年度までは、チーム里浜作りの方が計画したワークを浜で体験し、新聞にまとめて発表するという学習活動を行ってきた。今回は、事前に子ども達が浜で観察活動を行った後にまとめるのではなく、発見したことや不思議に思ったこと、もっと調べてみたいことを

持った上で、もう一度体験学習を行うこととした。6 月 30 日に子ども達の疑問を元にチーム里浜づくりの方が計画した体験学習を浜で実施した。その日の午後の 5 時間目もチーム里浜作りの方と共に体験したことで発見したことや疑問に思ったことを子ども達が自由に発表し、対話する授業を行った。

5 時間目の 3 年生全クラスの授業を公開し、放課後に授業についての協議を行った。

★ 3 年生の教師の発言から

「今年は、チーム里浜作りの方が作ってくれたレールの上から脱却しようということでスタートしました。最初は、3 年生だけでいったのですが、解決できないこともあり、それをチーム里浜づくりの方たちに教えて頂いて解決してくださったので、子ども達がいっぱい考えたという気持ちを持てることにつながりました。うちのクラスでは、ゴミのことに注目する子が多かった。」

★ 授業を参観した教師の発言から

・「今回の授業で里浜チームの方がいてくれてよかった。今までは、個人で新聞づくりという形だったが、どうしてもわからないことが出てくる。それを里浜チームの方が解決してくれたり、友達が解決してくれたりするので、子ども達の表情が生き生きしていました。」

・「授業をする立場に立つと「1 時間でねらうものは何か？」と考えてしまうが、自分を素直に出したり、楽しんだりするリラックスする空間がよかった。」

・「決まりきった授業の形になっていないのがよかった。自由に意見を話し合い、質問もいろんな角度からできていた。パターン化されていなくて自由に話し合うのができて面白かった。子ども達もすごく楽しんでいるなあと見てとれた。決して低学年の話し合いだと思わなかった。中学年なりのレベルの話し合いになっていた。」

・「環境体験学習のねらい自体が子どもの心を動かすことにあり、楽しめていない児童がいるのであれば、教師の手が入っていくべき。」

・「この授業は、「友だちの思いを感じようとする」のが目当て。でも全ての授業がそれでオッケーとはならない。…若い先生にとって、「今日の授業でいいのだ。」と思わせてしまうのはとても危険である。」

★ 本間先生の発言

「子ども達が言いたいこと、考えたいことから授業をスタートさせたい。と聞いた。里浜チームの方にも答えられないことがあった。彼らもそれが勉強になる。学校から地域に目を広げてみると素晴らしいことがおきている。専門家が考えてもわからないことが子どもの疑問の中にある。それをどうわかっていくのかが、科学の出発点。わからない

ことに対して大人がどういう姿勢で立ち向かうのか、それを子ども達に見せてあげるのが大切だと感じた。」

本間先生は体験学習の直後に、チーム里浜づくりの方との意見交換で次のような発言に注目された。つまり、「いままでは、私たちから、これを伝えたいという思いばかりが先行し、こちらのルールに沿って子ども達が活動する、ということでやってきたが、今回は、予め子ども達が何を感じ、何を知りたいと思うのかを知ることができ、準備をしやすかった。また、事後の授業での子ども達の発言を聞いて、子ども達がどんな風にプログラムを受け取ってくれているかを知ることができてよかった」ということに。

本間先生は体験型学習と対話学習の連携、および学校と地域連携、環境学習と多くの点でうまく重なって、非常に興味深い内容になったと評価された。私も同じ考えであった。しかし、協議の中で一部の先生の発言から次のような否定的な評価があがった。

- ・ 論点が分からないから、授業のまとめをどうしたらいいのか。
- ・ 一人ひとりの子どもがどんな力をつけているのか。
- ・ 若い先生が授業を子どもがただ話すだけでいいと思ってしまうのはよくないのではないか。
- ・ 楽しめていない子どもにもっと教師が手をいれるべきではないか。
- ・ 研究テーマの伝え合う力を育てていることになっているのか。

教科教育を熱心に研究されている先生方は、授業とはねらいを達成するために教師が子どもの学習活動の工夫を行い、的確な指示で学習展開ができているか、子どもの学びはねらい通りに達成されているかを厳しく評価し合うという授業研究をされてきた。そのような先生にとって、今回の授業は、子どもが思いつくままに話すのを教師はただ聞いている、授業に対する工夫もなく、教師は何もしていない、子どもは何について学んだかわからないと評価されてしまったようだ。

これまでの P4C の授業でも、例えば、絵本を読んで子どもが話し合う授業に対しても、同じような指摘を受けたことがある。子どもは何を学んだのか、教師は何をしたのか、これが授業なのかという批判に対して、その当時の私は反論できなかった。（そういう状況の中で「主体的で対話的で深い学び」を掲げる学習指導要領は 2020 年度から実施される運びとなった。）

反論は出来なかったが、体験活動を通すことで、子ども達は当事者意識を持ち、生き生きと発言し、友だちの発言と自分の考えをくらべて発言していたことがこの実践の価値であると私は確信していた。教師が一人一人の子どもの発言に対して評価したり、教師自身の考えを伝えたりしないで、子ども達が発言する時間を十分に与え、聞き、見守りながら

教師がファシリテートをするからこそできたとは私は考えていた。

そこで、本間先生と高橋先生に今回の授業の対話でどんなことが行われ、どんな価値があるかについて本校の先生方に伝えて頂くようお願いした。

本間先生と高橋先生が、8月30日に「考える学習のために」というテーマ⁵で1学期の振り返り、グループワークをされ、その時、6月30日の研究会の協議で出された先生たちの質問に応答された。その質問は6つあったが、それに対する、本間先生の回答は、やはりどれも私の確信に触れるものであった。今はその最初の質問と回答を紹介したい（全体の内容に関しては、「2010年度研究紀要抜粋(3)「考える学習のために」本間・高橋」を参照してください）。

それは、「浜のつく植物は、ハマヒルガオ。浜にはえている植物だからハマという言葉がつくと思った。」という子どもの発言に対して、「ほかにハマのつく植物は何でしょう。」と教師が応答したことに対するコメントである。つまり本間先生は、もっと別の発問の仕方がよかったのではないかと6月30日の研究会でコメントされたのである。このコメントに対して教師から出された質問①、「どうして「ハマ」のつく植物を答えさせるのはよくないの？」に対して本間先生は以下のような回答をされた。

この子どもの発言は「浜のつく植物は、浜に生えている」という一般法則（仮説）を自分は発見したという子どもの驚きだった。教師はその子どもの驚きに反応せずに、違う植物の名前という正しい答えを求める発問をした。本間先生は、多くの浜の植物を知るのでなく、子どもが発見したことに対して、他の子どもがどんな感想を持つことの方がより重要であるとされた。「〇〇さんの発見したことについて、他の人はどう思うのかな？」という発問の例をあげられた。

このことは、P4Cを実践する教師にとって大切な示唆だと私は考える。

浜の植物にハマの言葉がつくのは当たり前だとして受け止め、次にそれ以外の植物の名前、知識を求める発問を行ってしまう。この子どもの発言を一般法則の発見だと本間先生のように考えて聞けることは哲学的素養の無い教師には難しいかもしれない。しかし、子どもの驚きに気がつくことができるのではないか。子どもが発見した驚き、喜ぶ気持ちを共感的に受け止めて聞く。一人の子が持った驚きの発見を周りの子ども達と共有するファシリテートをする。子どもの驚きを共感的に受け止めることがP4Cを行うファシリテーターにとってとても大切な素養だ。哲学にとってとても驚きはとても重要であると梶形先生は私によく語ってくださった。共感的に受け止めた後に、その驚きを吟味する対話を行っていくことが授業では強く求められる。今では、このように応えられるかもしれない。

〇〇浜調査隊の実践は、総合的な学習の時間で環境教育の体験活動を取り入れた学習に、P4Cの対話の授業を織り込む授業であった。これは、オーストラリアのビューランダ小学

校が P4C と共に環境教育に取り組み、全学年を通して考えるスキルのカリキュラムがあることに憧れて私は取り組んだ。

今回は、本間先生と高橋先生からの助言を受けて取り組んだ 2 年生の「どっちに入るかな」というフラフープを使って対話をする授業と、5 年生と取り組んだ美術館で 1 枚の絵を観て P4C を行った授業について報告をする。2 年生のフラフープを使った授業は、ビューランダ小学校の授業を取り入れて行った。5 年生の美術館での授業は、海外の美術館では、子ども達が美術館のチューターの方と対話をして学ぶことに対する私のもう一つのあこがれともいえる実践でした。

¹ 「平成 22 年度（2010 年度）研究推進計画」を参照。<https://kansai.p4c-japan.com/wp-content/uploads/2025/08/%E5%B9%B3%E6%88%9022%E5%B9%B4%E5%BA%A6%EF%BC%882010%E5%B9%B4%EF%BC%89%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%8E%A8%E9%80%B2%E8%A8%88%E7%94%BB.pdf>

² 「2010 年度研究紀要抜粋(1)「伝え合う力 どうして 何を どのように」本間・高橋」を参照。<https://kansai.p4c-japan.com/wp-content/uploads/2025/08/2010%E7%A0%94%E7%A9%B6%E7%B4%80%E8%A6%81%E6%8A%9C%E7%B2%8B1%E3%80%8C%E4%BC%9D%E3%81%88%E5%90%88%E3%81%86%E5%8A%9B%E3%80%80%E3%81%A9%E3%81%86%E3%81%97%E3%81%A6%E3%80%80%E4%BD%95%E3%82%92%E3%80%80%E3%81%A9%E3%81%AE%E3%82%88%E3%81%86%E3%81%AB%E3%80%8D%E6%9C%AC%E9%96%93%E3%83%BB%E9%AB%98%E6%A9%8B.pdf>

³ 高橋綾・本間直樹『こどものてつがく ケアと幸せのための対話』（鷺田清一監修、大阪大学出版会、2018 年、177 頁）。また、「2010 年度研究紀要抜粋(1)「伝え合う力 どうして 何を どのように」本間・高橋」14 頁以下を参照。

⁴ 「2010 年度研究紀要抜粋(2)総合〇〇浜調査隊」を参照。<https://kansai.p4c-japan.com/wp-content/uploads/2025/08/2010%E7%A0%94%E7%A9%B6%E7%B4%80%E8%A6%81%E6%8A%9C%E7%B2%8B2%E7%B7%8F%E5%90%88%E3%80%8C%E2%97%8B%E2%97%8B%E6%B5%9C%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E9%9A%8A%E3%80%8D.pdf>

⁵ 「2010 年度研究紀要抜粋(3)「考える学習のために」本間・高橋」を参照。<https://kansai.p4c-japan.com/wp-content/uploads/2025/08/2010%E7%A0%94%E7%A9%B6%E7%B4%80%E8%A6%81%E6%8A%9C%E7%B2%8B3%E3%80%8C%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B%E5%AD%A6%E7%BF%92%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AB%E3%80%8D%E6%9C%AC%E9%96%93%E3%83%BB%E9%AB%98%E6%A9%8B.pdf>